

「国際労働者協会ロンバルディア支部結成宣言」

——『ラ・プレーベ』1876年7月6日——

勝 田 由 美

Associazione Internazionale degli Operai Federazione Lombarda
—— Manifesto (La Plebe, 1876.7.6) ——

KATSUTA Yumi

〔解題〕

ここに訳出する「国際労働者協会ロンバルディア支部」結成宣言は、イタリア社会主義運動史において、アナーキズムともブルジョア的民主主義とも異なる労働者政党の樹立に至る、最初の組織的運動として位置づけられているもので、1876年7月6日付の『ラ・プレーベ』紙に発表された。

1876年当時、イタリアの革新的政治勢力は、自由主義左派のデプレーティス政権のもとで普通選挙を求める共和主義・急進主義の旧民主派勢力と、バクーニンの影響下に一揆主義をとるアナーキズムに二分されていた。しかし、たとえば、ルガーノ（スイス）のイタリア移民のインターナショナル支部や、パリ・コミューンによる亡命者ブノア・マロンの関与していたパレルモの『イル・ポヴェロ』紙は、この少し前からアナーキズムを批判し、合法的活動も視野に入れた新しい社会主義を模索し始めていた。

『ラ・プレーベ』紙は、最初はローディで、1875年以降はミラノで発刊され、共和主義からアナーキズムまでの多様な進歩的勢力の論説や、国内外の労働者・農民の現状や組織状況を記事としていた。編集長エンリコ・ビニャーミは、1872年頃からエンゲルスとも書簡を交わしている。1876年にミラノに移り、同紙の編集委員となったオズヴァルド・ニョッキ＝ヴィアーニは、すでにローマで数年にわたって同紙の通信員を務めており、職業別組織の連合をつうじて労働者の解放をめざす、独自の社会主義思想を展開していた（拙稿「オズヴァルド・ニョッキ＝ヴィアーニの『三つのインターナショナル』論」『工学院大学共通課程研究論叢』第39－1号）。先述のマロンも、1875年末にはミラノに移り、経済的社会主義と労働組合主義を結合させた「完全社会主義」を唱え、ビニャーミに影響を与えていた（山崎功『イタリ

『労働運動史』1970年、青木書店、pp.110-111)。

「国際労働者協会ロンバルディア支部」は、このピニャーミ、ニョッキ＝ヴィアーニ、マロンの3人を中心に設立された。彼らの運動はしばしば「折衷主義」と評されるが、その結成宣言には、労働者に対する啓蒙的な呼びかけという傾向が全体に感じられる反面、後半では、連合主義、集産主義的アナーキズムの影響もみられる。しかし、その一方で、前半で明示された「職業別組織の連合」をつうじての「労働者自身による労働者の解放」という主張は、アナーキズムとは異なる社会変革の可能性を示すものであった。労働者自身による職業別組織、それは、市民社会のより発展した国々においては穏健な労働組合運動の表現であったとしても、ブルジョアジー主導の相互扶助協会が大半をしめるイタリア労働者の組織状況にあっても、既存の民主主義運動とは一線を画した戦闘的労働運動を基礎づけるべきものだった。

「国際労働者協会ロンバルディア支部」は、ミラノの「社会主義サークル労働の子」(Circolo Socialista Figli del Lavoro)や「経済社会研究サークル」(Circolo di Studi Economico-Sociali)といった思想団体を中核として作られたが、やがて2000人あまりのブラッチャンティ(農業労働者)や職人を擁するマントヴァの「労働者総協会」(Associazione Generale dei Lavoratori)が加わり、「国際労働者協会北イタリア支部」(Federazione dell'Alta Italia dell'Internazionale)へと発展した。そして、1877年2月に開催されたその第2回大会(マントヴァ)では、まさに農業労働者自身が、経済闘争と、その組織基盤形成のためのプロパガンダの重要性を訴えた。このおよそ2カ月後、イタリアのアナーキズムは、いわゆる「マテーゼ蜂起」の失敗により主たる活動家の大半が逮捕・亡命の憂き目にあい、壊滅的な打撃を被る。このとき、「国際労働者協会北イタリア支部」は、30以上の労働者、農民、および社会主義者の組織を擁し、会員3000人以上の大組織へと成長していた(Franco Della Peruta, *La Banda del Matese e il fallimento della teoria anarchica della moderna* 《Jacquie》 in Italia, in *Movimento Operaio*, maggio-giugno, 1954, pp.352-355.)。

「国際労働者協会北イタリア支部」は、1880年12月にキアッソ(スイス)で開催された第3回大会で、労働者の選挙活動を主張してアナーキズムと袂を分かち、イタリアではアナーキズムを連想させる「インターナショナル」の語を消して、その名を「北イタリア社会主義連盟」(Federazione Socialista dell'Alta Italia)と改めた。一方で、この組織名変更は、同支部が、結成時にめざしていた労働運動の中核組織とはなりえなかったことを暗示している。「労働者自身による労働者の解放」と、その手段としての「職業別組織の連合」とは、やがて、1882年に設立されるイタリア労働者党(Partito Operaio Italiano)の運動へと引き継がれる。

なお、この資料訳出にあたっては、北海道大学文学部西洋史研究室蔵の『ラ・プレーベ』復刻版(1974年、フェルトリネッリ研究所)を参照した。筆者に対し、この貴重な資料の長期貸し出しをお許しくださった元北海道大学文学部長の北原敦先生(現帝京大学教授)に、ここで改めて御礼申し上げます。

〔資料〕

国際労働者協会ロンバルディア支部結成宣言

イタリアの男女労働者、若者たちへ
男女の同志、市民諸君！

1864年9月28日、ロンドンの小さな会場で、英独仏の労働者たちが、「労働者の解放は、労働者自身がたたかいとらなければならない」こと、「農業労働者は連帯し、互いに理解しあわなければならない」ことをふまえて、以下のような原則のもとに一大連合組織の基礎を築いた。

「労働者の解放は労働者自身がたたかいとらなければならないこと、労働者の解放のための闘いは、特権と独占のための闘いではなく、すべての人に平等の権利義務を求める闘いであること、

労働者資本への従属が、あらゆる政治的、社会的、経済的従属の根底にあること、

それゆえ、労働者の経済的解放は、あらゆる政治運動が手段として従うべき大目的であること、

この目的をめざすこれまでのあらゆる努力は、国内の労働者に職種をこえた連帯が不足し、万国の労働者が友好的に団結し得なかったために失敗したこと、

労働者の解放は、地域的・一国的な問題であるだけでなく、解決のためには国をこえた理論的・実践的協力を要する、すべての先進諸国にかかわる問題であること、

工業化のすすんだヨーロッパ諸国に起こりつつある労働運動は、新たな希望を生み、過去の過ちをくりかえすことなく、なお分断された努力を集中するよう促していること、

にかんがみて、

国際労働者協会は、その創設に際し、加盟するすべての組織、個人が、人種や信条や国籍の別なく、あらゆる人への真実、正義、道徳にもとづいて行動することを宣言する。」

この宣言を読み、ある著名なフランスの歴史家は「世界に何かが起こりつつある」と叫んだ。その予感は一的中した。

労働者の大連合は、堅く団結した、社会主義の強力な勢力である。それは、思想を行動に結びつける。ヨーロッパにおける真の労働者集会である毎年の大会では、社会問題が徹底的に探求され、それが我々の時代ほど活発ではなかった頃を例に出せばわかるように、人間の問題に対して労働者が熟慮のうでで介入するようになってきている。インターナショナルの誕生以前には、あらゆる政治的・社会的闘いにおいて、働く人々はブルジョアジーの道具で

しかなく、政治においても産業においてもあらゆる利益から排除されるだけだった。大連合が確立した現在では、学習・宣伝・行動をつうじて自分自身のことを考える労働者や、人類の向上をめざす社会主義組織もみられる。

そればかりではない。インターナショナルは、未来に目をむけるとともに現状も看過せず、職業別（*per arti e mestieri*）組織、抵抗組織、労働組合、それらの連合体、信用組合、消費および生産組合と、多数のストライキをもって、労働者の利益擁護のためにあらゆるところに介入する。

したがって、その創設後、インターナショナルの運動が広まった国々では、賃金が上昇し、労働時間は短縮され、雇用者の横暴は陰をひそめた。

ベルギー、スイス、フランス、イギリス、ドイツ、スペインなどの労働者をみれば、それがわかるだろう。たしかに、彼らになお多くの横暴が加えられ、多大な労苦や貧困があるにしても、資本家に対して実質的な改善を力づくでかちとったのは事実である。

だがイタリアはそうではない。それはなぜか？

イタリアでは（ナポリをのぞいて）1871年まで、インターナショナルがほとんど知られていなかったからである。

イタリアの労働者は、自己を抑制し、謙遜しすぎて自信をもてず、社会的にみれば本質的に敵である者たちの、欺瞞的なご機嫌取りに耳を傾けてしまうからである。

他国の労働者はいずれも労働者だけの労働者連合に組織されているのに対し、イタリアのプロレタリアートは、イタリアの権力を争うブルジョア参謀本部の命令で、ただ兵隊のように整列している。

ブルジョアジーの教説を聞いてみよう。

「君たちの権利を顧みず、アルプスの向こうから来た、君たちの幸せを問題にする粗野な物質主義にも関心をもたず、義務を守って行いを正しくすれば、神は、世界を再び支配すべく我がイタリアを運命づけ、君たちを救うだろう。連帯しなさい、ただし、経済闘争の精神は持たずに。君たちの雇い主は君たちの最良の友であり、我々は彼らとともに相互扶助協会を運営するから、君たちは病気になっても援助が受けられるし、我々はいつでも自由と祖国を守るつもりだ。雇い主たちは適宜、その儲けのほんの一部を君たちに分け与えるだろう……それで社会問題は解決する。」

彼らの仲間である経済学者の意見も聞こう。

「貧困と賃金労働者はなくならない、だから、こうした必要悪を取り除こうとしても無駄である。君たちの労苦は、節制と節約と用心深さで最大限に和らげられる。君たちの主人を豊かにすることが、君たちの最大の利益であり、利益とは調和的なもののなのだ。そのほかにも、私たちは君たちのためにしたいと思っていることがある。相互扶助協会の運営と信用組合の創設だ。」

イタリアでは、こうした名誉会員（共和主義者でも王政支持者でも大差はない）によって

運営される相互扶助協会が多数つくられた。これは、イタリアの労働者を西洋の兄弟から隔てるために選りすぐられた手段であり、他国の労働者が、抵抗組合が組織するストライキによって状況をかなり改善したのに対し、イタリア労働者の状況は、みてのとおり劣っている。

相互扶助組合が労働者によって組織され、名誉会員の入会を認めず、大きな協同組合に結びついた組織であれば、有益であることはいうまでもない。しかし、イタリアでは、相互扶助協会は、労働者を貧困の旗の下に集め、支配下にとどめておいたにすぎない。

このことを明らかにしよう。

生産過程において機械、用具、原材料など経済学者が固定資本とよぶものの使用が増大し、資本が巨大になるほど利益も大きくなって、工業製品、あるいは価値は、（現存する社会ではすべての資本は利益を生むから）商品となることによって資本家たちにこれまで以上に利益をもたらしている。これはどういうことだろうか？ 工業製品に対する労働者の関与が減り、資本の関わりが増しているにしても、生産の全体における労働者の取り分が減っているということではないのか？

今や、労働者はつくりだすものよりもずっと少なく受け取り、自身の必要や生産のストックにみあった消費が可能な状況ではない。そのために、

1. 労働者は必要を満たすことができず、苦しみ衰弱している。
2. 商品が在庫過剰となり、流通停滞のために仕事を中断させられて、労働者はまったく経済的に困窮している。

しかし、商品のはけ口が少しでも開けば、雇用者は利益を求めて昼夜なく厳しい長時間労働を課すので、すぐに生産過剰となり、その弊害が出てくる。

このように欲に目がくらみ、飽くことを知らない資本家たちのおかげで、労働者には、過労で消耗して死ぬか、餓死するかしか道はない。

大工業が発達すれば必ずこのような事態になり、そのうちに、労働者がストライキなどで団結して資本家の貪欲さに力で対抗することになる。スミス、セイ、リカード、マカロック、スチュアート＝ミル、ソーントンといった学識ある経済学者たちが、労働者は組合（*leghe*）によってのみ自らの状況を改善できるとしたとおりである。

大工業によってますます虐げられつつあるイタリアのプロレタリアートよ！ こうした偉大な人々の言葉に耳を傾け、利益はつねに最適な調和を達成するというほら吹きのことよりも、事実の厳しい教えを受け入れるのだ！

そればかりではない。

国家は支出をいっそう増大させ、見境なく次々と税金を上げるので、新たな税を課された資本家は、負担の倍額を手にしようと家賃や商品価格を上げる。こうして、労働者のみが耐え難いほどの国家負担を支えることになる。

そればかりか、労働者は酷使され、収入も少ないので、けちな取引に手を染めて労働を放棄する者も多い。国民は、真の、唯一の富の源泉である生産労働よりも、投機や商売に励ん

では日に日に困窮し、過度に成長した商人たちは、生活のために、あらゆる手を使って公衆の目を欺こうとする。

ブルジョアジーは贅沢熱の虜となり、全資本家階級は儲けのことしか頭になく、利益に貪欲になっている。

いいつくせないほどの惨状がある。

もしプロレタリアートが互いに連帯せず、現存社会のあらゆる不正に対抗しなければ、貧困と不平等は際限なく拡大するだろう。

現状はまさにそのとおりだ。

イタリアの労働者は、そうしたことをまじめに実行せず、かつては最も豊かであったのに、今では西洋で最も貧しくなった。ブルジョアジーは、彼らを中世さながらに「おまえ」と呼び、当の労働者は古代奴隷のサンダルのような履き物をはいている。彼らの賃金は彼らの必要に対しても低く、彼らの大部分にとってはパンさえ贅沢品で、大半は粟やトウモロコシのポレンタを常食にしている。肉はおよそ口にせず、乳製品もほとんどとらず、いつも囚人のような具入りスープを食べている。

イタリアの大都市では、家主が厳しく取りたてる6カ月分の家賃を前払いできるほどの給料をもらえずに、玄関先で寝ている家族を見かける。家主の立場を濫用したこの窃盗まがいの行為が告発されれば、終身刑の牢獄は満杯になるだろう。

住むところを得られる者も、収入の4分の1から5分の1を払い、家具もなく、空気も光も入らない家畜小屋のようなところで動物のようにひしめいている。都市の近郊では、豚や山羊とともに不潔な家畜小屋に住む家族もいる。

都市という都市で、とくに冬には、やせて衰弱した不幸な物乞いの男女が道々にあふれ、新聞記事は、飢えと寒さで死にいたった多くの事件を報じる。

シチリアやサルデーニャの都市では、ごみをかきわけて犬のように食べ物をあさる半裸の子どもたちが道々でうろついているのを見かける。14才の子どもが16時間も働かなければならないような深刻な不正が、どこでもまかり通っている。

近隣諸国では、労働者の平均賃金は成人男性が3リラ、成人女性が1.50リラ、児童が0.75リラである。これがイタリアでは、それぞれ1.70リラ、70チェンテージモ、40チェンテージモとなる。

イタリアの貨幣価値が少なくとも1割は低いことを考えれば、我が国では、賃金が近隣諸国の半分以下であるといつてよい。農村労働者は、都市の労働者よりもいっそう悲惨である。フランスでは、農業労働者の夏・冬の平均賃金は食事付きで1.4リラなのに、イタリアでは、食事ぬきで95チェンテージモにすぎない。

イタリアのプロレタリアートよ！ 他国の兄弟たちは見慣れた、君たちを大いに苦しめる過酷な貧困のなかで死にたいのか！ 君たちは解放をおそれ、自分たちの旗をブルジョアの組織のなかで切り裂き、君たちを無駄話でひきとめる偽りの友人たちの運営する、相互扶助協会に加入している。

君たちは逆に、働いて生活しながらも、終わりのなき労働によって消耗しないことを求めているのではないのか？ もう少し楽に、幸せになれるよう、未来社会の礎を築くことを望んでいるのではないのか？ それなら次の2つの原則を実行するのだ。

－労働者の解放は、労働者自身の手でなされなければならない。

－義務なくして権利なく、権利なくして義務はない。

イタリアにもインターナショナルの組織がつくられるようになり、そこに集う労働者たちは、投獄や警告や悪意に満ちた告発に抗して、プロレタリアートの旗を降ろすことを拒否している。さあ、彼らと行動をとみにしよう。私たちは君たちの連帯のために集まったのだから、同志として握手を交わそう。

できる場所ではどこでも、組織をつくろう。経済－社会研究サークルをつくり、インターナショナルの支部を設立しよう。そして互いに協力して労働組合を結成し、印刷工組合のように抵抗組合を組織して、職業ごとに（*per arti e mestieri*）連帯しよう。

君たちのつくった抵抗組合が賃金のしかるべき増加を雇い主に要求しはじめるとき、イタリアには真の労働者の連盟がつくられる。多くの加入と実質的な救援活動で、それを力の限り支えよう。君たちがそうすれば、今度は他の労働者が君たちを助けてくれるだろう。どんなときでも他国の労働者への連帯を示そう。そのようにして君たちの状況は少しずつ改善され、君たちは徐々に力を得て、ブルジョアジーの最良の部分と結びついた各国のプロレタリアートが、独自の政治的・社会的志向のもとに、人類を現在よりもすぐれた新しい文明に到達させることとなるだろう。

現存する悪への憎しみがあっても、特権者が運営する相互扶助協会は、我々の状況を少しも改善できない。

陰謀や革命的蜂起も、現状では、せいぜい厳しい弾圧の口実にされるだけである。

このように言うと、我々を日和見主義者とし、穏健すぎると非難する者もいるだろう。そうした性急な者たちには、我々は君たち以上に気が短いのだが、不幸な結果に終わるだけの試みに幻想をもつのはよそうと言おう。数と組織によらなければ実際には何も成功しないのだから、数が増え、組織がつくられるのを我々は待っているのだと答えよう。

まさにそれゆえ、我々は、そのように我々を非難する者よりも革命的であり、組織をつくるのだ。

ブルジョアジーの政治は、私たちのためには何ひとつしない。ヨーロッパでは、階級としてのブルジョアジーは死んだ。ブルジョアジーは、中世に火をつけた、あの栄光の1789年から1793年までは燦然と光輝やっていた松明を、すすんで投げだし、彼らが死に追いやったブ

ロレタリアートの血に染めた。社会が揺れ動くたびに、懷疑論にいたるまでの自らの過去を否定し、恐れをなして震えながら軍国主義と教権主義に逃げこむ彼を、見るがいい。それ以外に方法があるだろうか？ 今や絶対王政を倒すことではなく、貧困と無知の根絶こそが問題なのであり、この貧困と無知とは、あらゆる政治的、経済的、社会的特権の廃止、すなわち真の平等の達成によってのみなくすることができるのだから。貧困と無知の温床であるこうした特権の大部分を有しているのは誰か？ ブルジョアジーである。彼らに多大な自己犠牲と見識がなければ、働く人々の解放を助けようとはしないだろう。1795年以来、社会主義者が有罪とされて苦難を受け続けてきたことが、我々がブルジョアジーに何を期待できるかを明白に物語っている。

だが、ブルジョアジーが全体としては決定的に反動的だとしても、貧しい人々と大義をもとにし、新しい教説の唱道者となる、情熱に駆られた若者や心豊かな思想家たちもまた、ブルジョアジーから出てくるのだ。

こうした心広き人々には、我々も愛と感謝をもって心をひらき、寛大に受け入れよう。彼らは、新たな資本主義的封建制度の発生という現状では、新たな従属と、すべての人の自由と平等という開化とを区別すべきだと知っており、革命の思想に知力と活力を捧げる。

こうした人々が小ブルジョアジーに対して、資本主義的封建制度こそ第一の敵であり、彼らを困窮させ、日ごとに略奪を強めて徐々にプロレタリアートの貧困に追いやることを理解させようとするなら、多数者を隷属させたままでおこうと滑稽なまでに努力を続ける金持ち連中や、司祭や、警官や、金で雇われた手下たちと、教育や労働や福祉、要するに、社会的平等と完全な政治的・市民的平等を求めて立ち上がった多くの人々とに分かれるだろう。

第4階級をなす男女の労働者、社会主義者諸君、社会革命によって人類が自由で平等な大家族となるために、君たちは歴史的運命を担っている！ 勇気をもってその任につき、党派や性格の違いをこえてイタリアの大労働者政党（grande Partito operaio d'Italia）を結成し、他国の兄弟に堂々と手を差し伸べよう。連帯を実現して全労働者の経済的・精神的利益をつねに擁護し、物質的状况を改善し、精神的にも向上しよう。どんなときでも、家族や仲間に対して善良で、すべての人に正しくあるように努力しよう。自己の尊厳に敏感になろう。親しい者たち、恋人や妻、子どもたちを虐げる者に、社会的正義を要求する権利はない。

条件がととのい次第、イタリアに労働者大会を開催し、君たちに関わる問題すべてを議論しよう。強力な国際連盟の基礎を築けば、農業労働者や農民との連帯も可能となる。

さらに言うことがある。

君たちは、連合主義、アナーキズム、集産主義、社会的精算といったことばは、大量虐殺と略奪と火災のことだとくり返し教えられてきたが、人民を中傷する者の言うことは聞かないように。ほんとうはこういう意味なのだ。

「連合主義」。今日にいたるまで、教権主義、王党派、共和主義のどれであれ、権威主義的精神は、予断に満ちた思想とそれぞれの「神」の名の下に、つねに人間の力を抑圧してきた。

「連合主義者」は、政治的または経済的な地域やコムーネの集団が、自身の処遇を自由に決定し、全体の利益となる社会的責務を担うべくすすんで協力しあうことを欲している。

「アナーキズム」。字義通りにはいっさいの政府や権威のない状態、すなわち連合主義が最終的にいきついた政治的・社会的状態。国家原則を人民の自発性をもって代替することである。アナーキズムのもとでは、諸集団はそれぞれ自律的に運営され、共通の利益によって自由に連帯する！

「集産主義」。心広き思想家や抑圧された人々は、本質的に不正な所有のありように対して異を唱えつづけてきた。共産主義はこうした抗議から生まれたもので、過去数世紀、ひいては原始キリスト教にまでその足跡が見られる。今日にいたるまで、政治家や社会主義者は、全体の利益のために社会にすべてを捧げ、個人の自由を充分に考慮しないものとして共産主義を理解し、社会的連帯を保証しつつ個人の自由も確保するような中立的用語を追求してきた。集産主義は、インターナショナルの大会で、その過渡的、試験的形態として言明された。

集産主義の下では、連合主義的またはアナーキズム的な政治組織はより完全な平等に基礎づけられる。集産主義者の大半は、すべての成人男女が選挙権をもつべきとする。また、経済的な、あるいはコムーネや地域の集団は自治権をもち、自分たちの利益にかかわるすべてを決定すべきだという。

すべての人が平等に、教養としての、または職業のための教育を受ける権利、労働手段を有し、自ら選んだ組合組織に加入し、また自由に脱会して他の組織に加入する権利をもつ。

社会的必要を満たすにあたり、集産主義者は土地、機械、作業場などの労働手段や原料となるすべてのもの、社会資本を取得する。これらは、譲渡不可能な資本として労働者組織の管理下に置かれる。労働者組織は、様々な必要を満たし、集合資本を不断に増大させるために、唯一の社会的負担としてその使用料を支払う。

この使用料支払いにより、労働者はその労働が生み出すものの全てと同等の権利を有する。このように、教養や職業のための教育を普及させ、資本に集産主義の方法を適用することで、あらゆる特権は廃止され、貧困は消滅する。

連帯と平等は確立される。個人の独立は、各人への適切な配分、すなわち、各自の労働が生み出すのに等しいものを用いる自由により、保証される。

「社会的精算」。時期は不確定であるが、資本の集会的所有と生産物の個人所有という、所有形態の不可避的な変更。この社会的精算のありようは、支配階級の対応により異なる。彼らとその正当性を認めれば、これまでの所有権を考慮のうえ、友好的に召還の形で事態が進むだろう。しかし、彼らが反対する場合には、社会的精算は革命によって実現されるだろうが、そのありようを今決定することはできない。

男女の同志諸君、イタリアの若者たちよ！ 伝えられるべきはこのことだ。

簡潔に述べようとしたので不明確なところもあったかもしれないが、私たちの舌足らずな表現を君たち自身が補うように、ともに学び、ともに活動しよう。我々は、君たちに指導者

を気どるつもりはまったくない。指導者の時代は去った。ともに学び、我々に共通の利益を守るために、すでに集まり始めた仲間たちに連帯しようと言いたかったのだ。男女の同志諸君、握手をしよう。

インターナショナル万歳！

人間万歳！

1876年7月1日、ミラノ

代表者一同。

(本学助教授)